

この仕事が好きだから

清水 節子

清水母乳育児相談室(北海道別海町)

東京で活躍中の高橋さんは、卒業以来道東に住みついた私に、いつも新鮮な情報を送り続けてくれる大切な友人です。忙しい本務の合間をぬって、全国各地で活躍中の開業助産婦さんを訪ね、素敵な出会いを重ねています。そんな高橋さんからのバトンタッチなので、私も尊敬する大先輩との出会いからペンを走らせたいと思います。

桶谷先生を訪ねて

『アレルギーを予防するためには、新生児に一滴もミルクを与えるな』という小児科 Y 先生の言葉に発奮し、当時富山県高岡市で開業されていた桶谷先生の門を叩いたのは、昭和 53 年の秋でした。

桶谷先生の手技は、これまで私が行っていた乳房マッサージとは異なり、お母さんたちの気持ちよさそうな顔が印象的でした。手技中お母さんたちに話される一言一言も、耳新しいことが少なくありませんでした。何十万というお母さんと赤ちゃんを一緒に継続して診てこられたからこそ言えることであり、真実なのですね。この手技の奥深さと私自身の未熟さを知らされ、事情の許す限り、別海と高岡を往復する年月を重ねました。仕事も子育ても夢中で過ごした 30 代後半のことです。

母乳外来の開設と私の開業

この研修は、母子健康センターでの母乳外来開設のきっかけとなりました。スタッフの短期・長期の研修派遣も実現、同じ建物内の保健センターの保健婦・栄養士の理解も得て、別海町の母乳栄養の割合は飛躍的に伸びました。母子健康センタ

ーでの仕事は、思春期から妊娠・出産・育児そして更年期まで幅広く関わることとなり、それはまた、魅力でもあったのですが、私自身としては、このさまざまな業務に、さらに管理職としての役割もあり、この桶谷式乳房治療手技とじっくり取り組めないもどかしさがあったのも事実です。平成元年、母子健康センターの存続をめぐる大きな混乱のなかで、家庭内でも夫の転勤など多くの問題を抱え、予定外の行動でしたが、退職し母乳育児相談室の開業に踏み切りました。

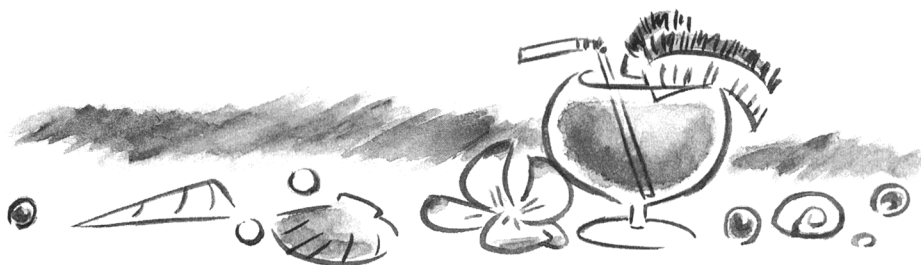
断乳アルバムから

相談室を訪れるお母さんたちが断乳の記念写真にいろいろなコメントを残しています。

——母乳がほとんど出なくて、陽太は吸いついてくれず、不安だらけでスタートした 1 年 2 か月だったけれど、助産婦さんのおかげで病気もせず元気になってくれました。あの時、ミルクにするのは簡単だったけれど、頑張って通って本当に良かったです。2 人目の時もよろしくお願いします。(陽太君のお母さんは今、その 2 人目のお子さんを、あふれる母乳で育児中です)

——翔太へ。おっぱい大好きでいてくれてありがとう。あなたにおっぱいをあげることができて、お母さんはとても嬉しい。断乳も無事終わり、2 つ目の勲章をもらったような気持ちです。お兄ちゃんからは 1 つ目の大きな勲章を、そして翔太からは小さいけれどキラキラ光る勲章を。ありがとう！

——あずさへ。今まで出の悪いおっぱいを一生懸命吸ってくれてありがとう。断乳の時はあっけな



く寂しかったけれど、また1つ、おとなになってくださいね。そしていつの日か母となる日が来たら、母乳で育ててあげてね。

このアルバムにはお母さんたちのいろいろな想いがいっぱいつまっています。お子さんたちの成長ぶりを窺わせる写真入りの年賀状とともに、私の大切な財産です。

もも太郎会のこと

母乳育児相談を続けるなかで、難しいことの1つに食物アレルギーの問題があります。同じ悩みを持つお母さんを2人、3人と紹介するなかで、もも太郎会が誕生しました。ネーミングは『昔の食生活に学び、もも太郎のような丈夫な子供に育てよう』ということです。農薬や添加物に汚染された食品や、甘いもの、スナック菓子などのあふれる現代にあって、子供たちの健康をどう守るか、お母さんたちは真剣に考え、そのことをもっと多くの人とともに学ぼうと、秋には専門医を招いて2度目の講演会を開くため奔走中です。

そんななかで、5月の例会はお花見を兼ねて行なわれました。根室の千島桜の名所、清隆寺の庭におにぎり持参で集い、皆で知恵を出し合い、励まし合い、皆の顔がゆったりほころぶひと時です。私もこの会のなかで一緒に学び、また、断乳後のお子さんたちの経過も、成長ぶりも窺い知ることができ、よい励みとさせてもらっています。

大好きな、この仕事

前号の高橋さんから、「若い助産婦が開業を目差す原動力は？」という問いかけがありました。個人開

業には経済的なことも含めて厳しい問題もないわけではないと思うのですが、開業している若い助産婦は真摯にお母さんたちと向き合って仕事をしています。自分が手技することでお母さんたちに安楽を与えてあげることができ、そのことで、子供たちも満たされて育っていく、この手応えでしょうか。彼女たちに直接尋ねたら「ただ、この仕事が好きだから」という答えが返ってくるような気がします。

開業はしていませんが主体的な出産を選択し、母乳育児を楽しんでいる助産婦もいます。そんな1人を先日札幌に訪ね、早速、彼女の胸を借りての勉強会となりました。

「うーん、もう少し腰から力を入れて……etc」、手技を受けるお母さんの立場で、我流に陥っていた私の欠点を鋭くアドバイスしてくれました。彼女は、この育児休職の間にたくさん充電し、ひとまわり大きくなって職場に戻っていくことでしょう。私もまた、初心に戻って学びを深め、母乳哺育の援助者として、大好きなこの仕事を大切に続けていきたいと思っています。

* * *

さてバトンを北海道立衛生学院助産婦科とともに学んだ、ガヤさんこと加藤和子さんに送ります。北陸に移られてずいぶん経ちますね。地域のなかで子育てをされていて、助産婦の目を通して感じられたものは何でしたか？ 石川医療技術専門学校の母性担当教官としてカムバックされた今も続けておられる子供劇場のことや、北陸での助産婦と語る会のネットワークづくりなど、楽しいお話が伺えそうですね。よろしくお願いします。